

佐々木 千之（ささき・ちゆき）

1、プロフィール

小説家。雑誌記者をしながら同人誌「短篇」を創刊、自伝的長篇小説『憂鬱なる河』でデビューし、文芸誌「文芸王国」を創刊するがやがて伝記小説に転じた。

<生没>

1902(明治 35)年5月4日 ~ 1989(平成元)年3月9日

<代表作>

長篇小説三部作『憂鬱なる河』(「北国」「苦悩の街」「恋愛行」)

伝記小説『葛西善蔵』

<青森との関わり>

青森師範学校付属小学校入学、7年くらいを青森に過ごす。

2、作家解説

札幌生まれ。父の青森の御料局勤務のため、青森師範学校付属小学校に入学。父の転任にともない上京、独逸協会中学校に入学。同校卒業の後、独逸語専修学校に入る。

大正 10 年文学の師生田春月の世話で「文章倶楽部」の訪問記者、次いで「新潮」の編集記者となる。

13 年同誌の月例合評会で葛西善蔵を知り、雑誌記者と同郷の大先輩という関係以上の親密な間柄となる。14 年処女作『憂鬱なる河』の第一部「北国」出版の記念会には文壇の大物が多く集まり、善蔵もその一人であった。

15 年作家として独立するため、新潮社を退き、三部作の完成に専念。

『憂鬱なる河』は自伝的長篇であり、第二部「苦悩の街」第三部「恋愛行」は、浅虫温泉の友人宅でも執筆され、完結をみたのは昭和3年である。第三部(昭和3年6月刊)の巻末には、善蔵、生田春月、福士幸次郎、三上於菟吉らの評が載せられてある。第一部は青森を舞台とする少年期を、第二部では主人公、および

周囲の青春群像の憂愁を描き、第三部では作家を目指す主人公の都市と山国の二人の女性との愛に揺らぐ心理を描いた。四人の大家の評は、共通して調和と清純という賞賛の反面に、例えば善蔵のように生命感、自然感を欠くという批判があった。

昭和3年6月、善蔵を顧問格にして田村文雄らと創刊した文芸誌「文芸王国」は、全九冊をもって、発禁問題を原因として廃刊したが、3年9月号が「葛西善蔵追悼号」となったことは不思議な偶然であった。

伝記ものとしては『葛西善蔵』(昭和 18 年刊)の他、間宮林蔵、和井内貞行をとりあげたものがある。

3、資料紹介

○『葛西善蔵』

図書

1943(昭和 18)年6月 10 日

190mm × 135mm

小説。その晩年に親しく身近にあった作者に、臨終間近の葛西善蔵が、「自分をモデルにした作品を書くように」と言い残したのを受け、十有五年の歳月を経てから書き上げ出版したもの。葛西善蔵の主として晩年をできるだけ事実忠実に描いた作品。